
転生した少年の放浪物語。

霊華@アカガミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生した少年の放浪物語。

【Nコード】

N8527P

【作者名】

霊華@アカガミ

【あらすじ】

持ち前の不幸体質で死んでしまった青年。死んで目が覚めた場所は天国でも地獄でもなかった！。青年は世界を管理する女性に幾つかの能力を貰い「魔法先生ネギま！」の世界に転生。青年は少年になり10歳になって麻帆良学園に。（原作は暫く始まりません。）

Lesson・0（前書き）

なんか転生した意味がないって感じですけど話の都合上で転生物にしました。

Lesson・0

>br<

ん……此処は…どこ？

確か俺は放火魔が民家を放火しようとしていた所に出会わしてしまい、錯乱したのか突然ナイフを出してきて刺されて……

ああ、そうだ。何回も腹を刺されて痛みのせいで気絶したんだった。

……ってことは此処は死後の世界かな？

あれだけ刺されれば出血多量で死んでもおかしくないし。

だとしたら本当に不幸な人生だったなあ。

いや、不幸ながらも25年間も生きてこられただけでラッキーだったのかもしれない。

まあ、俺が死んでも哀しむ人なんか家族くらいだけってのが救いかな？

悲しませる人が少ないだけで突然死んでしまったことの罪悪感が軽くてすむ。

それより、此処はどこなんだろうか？

まったくもって分からない。何も無くて白い空間が永遠と広がっているだけ。

死後の世界なら死後の世界らしく閻魔ぐらい居てくれてても良いじゃないか。

「此処は時と空間の狭間だよ。」

ん？

「だ、誰？」

急に聞こえた声の方を向くと、其処には俺と同じくらいの年齢の女性立っていた。

女性は俺たちがいう神みたいな存在で数ある世界を管理していて、それと同時に魂の輪廻も管理しているらしい。

そんで何で俺の前に表れたかというと、全ての生命は一つ一つ寿命が完璧に決まっているのにも関わらず、俺は生まれつきの不幸体質で決まった寿命より早く死んでしまい魂が輪廻から外れてしまったからだそうだ。

ハハハ、まったくもってツイてねーや……。

…そういえば俺はどうなるんだろうか？

輪廻っていうものはよく分からないけど、それって世界から除外されたようなものだよね？

「な、なあ」

「ん、なに？」

「俺は……俺の魂はどうなるんだ？」

輪廻から外れて世界から除外されたようなもんだから消滅とか？

不幸体質が魂から染み出ているものなら有り得なくもない。

「ああ、それならキミには転生してもらつよ」

……は？

「ど、どつして？！」

「んゝどうしてって言われてもなゝ。キミは正確にはキミの魂が輪廻から外れたでしょ？」

「…ああ、それと転生が何か関係あんの？」

「そう、私は魂の輪廻の流れを管理しているけど、魂を輪廻には戻せない」

うんうん

「それで魂は何処でも良いから世界に存在していないといけないの」

うんうん……で？

「魂を消すこともできない、でも元の世界の輪廻に戻るのは無理だけど他の世界の輪廻に組み込むことはできる」

「つまりだ。別の世界の輪廻に俺を組み込む。結果、俺は転生するってこと？」

「そういうこと。いやー理解力があつて助かるよー。」

不幸で何に突然まきこまれるかわからないから何が起きたか瞬時に理解しないといけなく自然と身に付いただけで……なんだろう、誉められているはずなのに素直に喜べない

「でね、転生してもらつ世界はキミが生きていた世界より危険があるの」

そんな世界の輪廻に組み込まれないといけないのか俺？！

「だから今回みたいに決められた寿命より早く死んでもらつと困るからキミには力を授けます」

「力？」

力ってなにさ？

「力っていうのは漫画やアニメとかの技や能力のこと。で、キミには3つの力をあげるよ」

漫画やアニメって、何その子供の夢みたいなの。

でもなあ、漫画はともかくアニメは全然みてなかったんだよな。

それに、どんな危険がある世界に行くか知らないからなあ。

「ねえ、俺ってどんな世界に行くの？」

行く世界ぐらい知らないとな。どんな力をもらうかは、それからだ。

「うんと、キミが生きていた世界にあった『魔法先生ネギま！』
って漫画の世界だね」

……まさか漫画の世界とは思いつかなかったよ。

しかし「ネギま！」の世界か、読んだことがあるから大体のことは
知ってるけど……ふむ。

「よし！」

「決まった？」

「ああ。まず1つ目は魔法を使う才能」

魔法がある世界に行ってもこれが無いとね。

「はいはい。2つ目は？」

「2つ目は魔力コントロールの才能で」

「なんか地味な力ばっかだね」

ほっとけ！。魔力のコントロールができなかったら魔法を使う才能があっても意味がないじゃないか。

魔法を使えても魔力制御が下手だと大技の魔法を一回使っただけで魔力が空になる可能性だってあるんだし。

「じゃあ最後の3つ目は？」

「俺の不幸体質を消してくれ！？」

「……………そんなので良いの？」

「ああ」

不幸体質を取り除けば普通になるはず。

俺だって人並みの幸福を味わいたいんだ！？

「それじゃあキミを転生させます。くれぐれも決まった寿命より早く死んで輪廻から外れないように」

「ああ、分かった！」

「じゃあ、さようなら」

彼女の別れの言葉を最後に俺は意識を落とした。

「地味な力ばっかだから特別にもう1つの力をあげるね（ニヤリ）」

彼女がそんなことを言っていたことも知らずに。

Lesson 0 (後書き)

彼はどつなるんでしょうか？

Lesson・1（前書き）

前世の名前と転生後の名前を発表。

うまく纏められずぐだぐだな感じになってしまいました。

Lesson・1

不幸^{かわ}体質^{ほたる}で死んでしまい転生してからボク「一条^{いちじょう} 隆次^{りゅうじ}」こと「澄^{すみ}川^{かわ} 蛭^は」は10歳になった。

転生して一番変わったことは自分の性格だと思う。

人生を一からやり直しているんだから当然だけど、転生して不幸体質が無くなって生活環境が急激に変わったのが理由かもしれない…。

それで今、ボクはお世話になった関東魔法協会の施設を出て、これからお世話になる関東魔法協会の本部である麻帆良学園に向かっている。

なんで原作の舞台に向かっているかというと、ボクが5歳からお世話になっていた施設に居られるのは10歳までってこととボクの魔力が原因。

ボクの内包魔力は一般魔法使いを遥かに超える内包量らしいく、一度どれ程のものなのか施設の人に聞いてみたら驚く答えが返ってきた。

だって主人公のお父さんである英雄のナギ・スプリングフィールドをも超えるらしいんだよ？！

誰だって驚くでしょ？

でも、それが原因で……………ボクの…ボクの転生してからの新しいお母さんとお父さんが……………殺された……………。

ボクの強大な魔力を狙って誘拐しに来た奴らに……………。

両親を殺してボクを攫った奴らは関東魔法協会の反抗勢力の一部だったらしく、攫われた三日後にアジトを嗅ぎつけた協会の人たちに呆気なく捕まった。

そのときに協会の人たちが保護してくれて協会の保護施設に入れてくれた。

その後、誘拐された理由がボクの潜在内包魔力が強大だからと分かり一般人だけど、また狙われる可能性があることから魔法について知らされた。

施設では最低限でも自分自身を守るようにするために簡単な初歩魔法と魔法の射手を教えてもらい魔力制御の方法を教わったんだ。

それで施設で教えてもらえる魔法と守ってもらうのにも限界があり10歳で施設を出るのを機会に支部より安全な関東協会の本部である麻帆良で保護されることに。

だから学園都市「麻帆良」に向かっている訳です。

どうしよう……麻帆良に着いたのはいいけど待ち合わせ場所に誰も居ない。

確か学園の魔法関係者の人が迎えにきてくれるはずなんだけど、時間を間違えちゃったのかな？

待ち合わせ場所を間違えたってわけじゃないし……どういうこと？

よし！本当に待ち合わせ時間と場所が間違っていないか再確認しよう！。

まずは待ち合わせ場所…

・麻帆良学園中央駅近くのオープンカフェ

…うん、駅近くのオープンカフェは此処しかないから間違っていない。

次は待ち合わせ時間…

・ 13時00分

… 13時前に着いてるから遅れちゃったって訳でもない。

じゃあ、なんで15分も過ぎてるのにだれもこないんだろ…もしかして忘れられた？。

「うーん……………?!」

こ、これって結界?!。なんで!どうして急に!?

よく周りを見たらボク以外の人が居ない?!。もしかして人被い系の魔法??

「君は何者だ?」

へ?

「…ひゃっ!」 ドサッ!

イタタタ。な、何なのいったい。急に後ろから声をかけられたとおもったらスキンヘッドでサングラスをした黒服の巨体な人が居て驚いて椅子から落ちちゃった…。

「君は何者かと聞いている」

「な、何者かって」

突然なんなの？。っていうか誰？！。顔が凄い怖い……もしかして麻帆良の人？。

…とにかく立たないと。

「え、えーと、本日から此方の学園でお世話になります澄川螢といます」

慌てながら説明しお辞儀をする。

「なに？。それは本当か？」

すると何か困惑した。眉毛が無いから表情が読み取りにくい。

「は、はい」

「……むう」

何で困惑するの？。もしかしてボクが今日、学園に来るって知らされていない？！。

「悪いが上に確認するので暫く其処から動かないでくれ」

「分かりました……」

ボクから少し離れて携帯で連絡しはじめた。やっぱりボクのことを知らされていなかったみたいだ。

連絡が終わり此方に戻ってきた。

「……すまなかった。上からの連絡に不備があったようだ」

「……はあ」

こんな簡単な連絡で何で不備があったんだろう？

もしかしてボクのことなんてどうでも良いのかな？

だとしたら大丈夫なのかな……すっごい不安だ。

「それじゃあ私に着いてきてくれ。学園長のもとに案内しよう」

「は、はい！」

多少の不安を抱きながらスキンヘッドの人の案内で麻帆良学園学園長のもとに向かうことになった。

Lesson・1 (後書き)

まだ原作開始4年前です。

つまり主人公は3・Aより学年が1つ下です。

Lesson 2 (前書き)

なんというグタグタ！しかも短い！

なんとなく「あの人」と一緒にさせてみました。
だ、大丈夫ですよね！

Lesson・2

スキンヘッドの人に案内されて学園長が待っている女子中等部の校舎にきた。

何で女子中等部校舎なのかと聞いてみたら「此处に学園長室が在るからだ」らしい。

普通だったら大学部とかに在るじゃないかなと思いついで女子中等部に在るのか質問し直したら「……………」と、黙秘された。

……………もしかして学園長ってそういう趣味の人？。

そうだとしたら……………そんな人の下で保護してもらうのは嫌だなあ。

護られる立場だから文句は言えないけど……………やっぱり嫌だなあ。

はあ、もともと原作は週刊誌を立ち読みしたときに流し読みしてたから知らないに等しいし、生まれ変わって10年も経つから主人公が子供ってことと舞台が学園都市ってくらいしか覚えてない。

こんなに不安になるなら流し読みしないでちゃんと読んでおけばよかった……………不幸だ。

「着いたぞ」

へ？ もう着いたの？。

どうやら自分の不幸さに浸っていたら学園長室前に着いたみたい。

女子中等部の校舎でも、かなり広がったから少しは時間が掛かると思ったけど意外と早く着いた。

スキンヘッドの人が扉にノックして

『入ってよいぞ』

と、言われたのでボクとスキンヘッドの人は変態(?)だと思われる学園長が中で待つ学園長室に入った。

学園長室に入ったら立派な机に構えたお爺さんと眼鏡をしたロングヘアの綺麗なお姉さんが待っていた。

「学園長。澄川蛍君をお連れしました」

「うむ。ご苦労じゃったな。自分の仕事に戻ってよいぞ」

そう言われスキンヘッドの人は部屋から出ていった。

スキンヘッドの人に学園長って呼ばれてたから、このお爺さんが学園長だよな？。

うん……頭が長い。

本当に人かどうか疑いたく成る程に後頭部が異様に異様に長い。

その人外っていてもいい長い頭を支えている細い首も謎だ。

よく見たら耳たぶも異様に長いし……もしかして前に施設の人が言っていた西に居るっていわれている妖怪の類いなのかな？

「君が今日から学園の保護下に入る澄川蛍くんじゃな？。ワシが麻帆良学園の理事兼関東魔法協会の理事を務めておる近衛近右衛門じゃ」

「は、はい！。澄川蛍ですよろしく願いします！」

び、ビックリした！。別のことを考えてるときに急に話を降らないでよ！。

「先ほどは済まなかったのお。今日、君が学園にくるということは伝えたつもりじゃったんじゃが不備があったようなんじゃよ」

「…い、いえ。」

「ようなんじゃよ」「って……謝る気あるのかな？。」

「ほっほっほ」とか、わざとらしく笑ってるけど……もしかして誤魔化されてるボク？。」

それとも軽く100歳は越えてそうだしボケてるのかな？。」

「でしゃ、蛭くんには明日から学園の小等部に通ってもらうんじやが……」

「…？」

な、なに？

「小等部には学生寮が無くてのお。それに10歳の蛭くんに一人暮らしをさせるわけにはいかん」

それじゃあボクはどうなるの？！

「そこでじゃ。此処にいる葛葉刀子先生の基で暮らしてもらおう

とおっておる。どうかのう？」

「……………はあ」

どうって言われても……………お姉さん…葛葉先生は了承してるの？。

というかこの人も魔法関係者？

「はじめまして。今日から貴方が学生寮がある中等部に上がるまで貴方を預かることになった葛葉刀子です。これからよろしくね澄川くん」

「は、はい。よろしく願います葛葉先生」

ちょっと不安だけど優しいそうな人だから大丈夫だよね？。

ここまで連れて着てくれたスキンヘッドの人じゃなくてよかった。

Lesson・2（後書き）

他の作品のと被らないようにした結果がこれです！

だから活動報告で質問したって訳です。
なんか不安ありません。

オリキャラと一緒にさせるって考えもあったんですが原作キャラを
採用しました。

ハハハ、批判的な感想がきそつで怖いです（汗）。

Lesson 3 (前書き)

うん……相変わらずのグダグタ。

刀子先生との会話的な物を増やしかつたのに、どうしてこうなった
！！

Lesson 3

葛葉先生の下でお世話になりながら学園の小等部に通うようになってから数日たった。

まだ友達はできていない……施設でお世話になっていた時に通っていた学校じゃ転生して人見知りの性格になったせいか一人もできなかった…。

だから友達をつくりたいんだけど……だけど、その目標を達成する前に死んでしまうかもしれません。

「どうした逃げてばかりいないで反撃してこい!!」

「ケケケケ」

「ひひひひひひひひっ!」

なぜかボクは現在、リゾート地のような砂浜で魔法を放ってくる外人の女の子とナイフを振り回す片言なお人形さんに追いかけ回されています。

殺しにきてるんじゃないかと思う攻撃に何度も死にそうになって正直なところ何回かちびりそうに……どうしてこうなってしまった

ろう？

さっきまで家で宿題をしながら葛葉先生が帰ってくるのを待っていただけだったのに――！！

これじゃあ自分の身を守る術を身につける前に死んじゃうよー！
学園長――っ！！

数時間前。ボクは葛葉先生の部屋で学校で出された数学の宿題をしながら先生の帰りを待っていた。

宿題が終わる頃に先生は仕事を終わらせ帰ってきた。

「ただいま帰りました。澄川くん。学園長先生が呼んでいましたので、申し訳ないんですが今から学園長室に行ってくださいませんか」

「先生おかえりなさい。……学園長先生がボクを？ わかりました行ってきます」

もう夜なのになんだらう？ ボクを呼び出したってことは魔法関係

のことだよね？

「お願いします。外は暗いので気をつけてくださいね。帰ってきたら夕食にしましょう」

「はい！」

そしてボクは学園長室に向かった。

今日の晩御飯はなんだろう？ できれば手作りじゃなくてインスタントだったらいいな。

先生の『あの』手料理を食べるぐらいならインスタントの方がマシだよ…… ホントウニ。

自分でも作れるんだけど火は危ないって台所に立たせてくれないんだよね…… っと。

また考え事（現実逃避）をしてたら、もう学園長室に着いちゃった。

「学園長」 コンコンッ

『開いておるぞい』

扉をノックし部屋に入る許可を聞き部屋に入ると

「ん？　なんだ私に面倒をみてもらいたいとかいう奴はコイツか
ジジイ？」

「ふおふおふお。そうじゃよエヴァ」

知らない金髪…外人のボクと同じ歳ぐらいの女の子が胡座をかいて
学園長と囲碁をしていた。

なにこれ？　……　ってボクの面倒ってなに！

もしかしてボクが葛葉先生の料理が死ぬほど不味いって思っていた
ことが先生にバレて部屋から追い出される？！

数日しかたってないけど先生との生活に馴れ始めたところなのに知
らない外人の女の子のお世話になるのはヤダ！　絶対にヤダ！

「この坊やを私にねえ……ふむ」　パチッ

「どうじゃろう資料をみるかぎり素質は十分じゃと思うぞ？」
パチッ

この二人。なんでボクの意味も聞かずに話を進めながら囲碁をして

いるんだろう……。

「確かに魔力だけなら「ヤツ」よりも、貴様の孫娘をも越えてい
る……なっ」パチッ

「そうじゃろ。そうじゃろ……ふおっ!!」

「ふっ…また私の勝ちだジジイ。良いだろう。一度、私が教える
にふさわしいかみてやろう」

「もう二目半負け……それじゃあ頼むぞい」

……なんか外人の女の子が勝ったみたいだけど魔力とか言ってるっ
てことは、あの子も魔法使い？

あと何でか知らないけど物凄く嫌な予感がするのは何で！

それで外人の女の子に系か何かでがんじがらめにされて無理矢理、

女の子の家らしき場所に連れて行かれて、ボトルシップみたいな大
きいガラス瓶の中に入れられて今に至るんだけど……

「ハハハどうした坊や！ 反撃してこなければ素質をみる前に死
ぬぞ！！ 『魔法の射手 連弾・氷の24の矢！』」

「くう……！！」

無詠唱の氷の矢の雨で本当の本当に死にそうです……。

「ケケケ 斬り殺シチマウゾ」

「っ?!」

あとナイフの人形さんにも斬り殺されかけてる…。

「ハア ハア」

な、なんとか今のところは前世で鍛えられた（不本意に備わった）
危機感知でなんとか擦りながらも避けて逃げられているけど、このま
まじゃ本当に殺されちゃう。

反撃しないと……でも反撃しようにも……つ、杖がない！

こんなことになるなんて思ってもいなかったから部屋に置いてきちやっただよ！

杖がなくちゃ初級魔法の魔法の射手どころか初心魔法すら使えないよー！？

ふ、不幸だ………うう。

Lesson・3（後書き）

月×日

麻帆良にきて数日。

友達ができる前に知らない外人の女の子に殺されて死にそうです。

死ぬなら最後に葛葉先生に会って数日間だけど、お世話になったお礼を言いたいです。

もし死んだら学園長を呪ってもいいよね？

だって学園長が、あの子にお願いしなければこんな目にあわなかったわけだし。

b y・澄川 蛍

Lesson・4（前書き）

グダグタなような良い感じのような、そんな訳分からん感じにできあがりました。

すみません。

Lesson・4

Side・エヴァンジェリン・

坊やに私が教えるに値する素質があるか別荘に無理矢理連れ込み従者のチャチャゼロと共に追い込み始めて20分弱。

使っている魔法が魔法の射手だけとはいえ私とチャチャゼロの攻撃をかわし続けている。

だが、何故か反撃をしてこない……おかしい妙だ。

ジジイに見せられた資料によれば、使える魔法は初心魔法と初級魔法の魔法の射手だけが巨大な保持魔力にみあった才能と制御力があり、魔法を知りこの学園に来るまでの5年間で自由自在に魔法の射手を操れるとあった。

なのに初級魔法とはいえ、これだけ攻撃されて反撃をしてこないどころか、する素振りも見せないのはおかしい。

まさかとは思うが私に「人」に魔法を使い攻撃することを躊躇っている訳じゃないだろうな？

だとしたら私が教える価値など微塵もない餓鬼だ。

いや、別に期待などしていた訳じゃないんだが…。

しかし、上手く避け続けてきたがどうやら集中力と体力が限界が近づいてきたようだな。

私の手加減した魔法の射手とチャゼロの斬撃を紙一重で避けていたが徐々に当たりはじめるようになった。

ふっ。そろそろ終わりにするか。

悪く思ふなよジジイ。こいつは私が教えるに値する器じゃ……………ん？

まで、までよ。たしか坊やはにジジイの所に何も聞いてない雰囲気
で来なかったか？

だとしたら……………杖や指輪等の魔法媒体を持ってきてなくてもおか
しくない。

ま、まさか！ 反撃したくてもできないんじゃないっ！！

もしそうなら「闇の福音」の私が魔法を使うことができない唯の人間
の餓鬼に一方的に攻撃していたことになる……………。

そ、それは誇りある悪の魔法使いとして非常に不味い！

このことが知られたら良い笑いものだ！！

攻撃を止めなけねば！ 先ずはチャチャゼロをとめないと！

「チャチャゼロー！！！」

S i d e - 蛭 -

な、なに？ 急に攻撃が止まった……。

何で攻撃が止まったかは分からないけど、いつまた攻撃を始めるか分からないから、あの子の言うとおり反撃をしないと。

でもどうすればいい？ 反撃しようにも魔法を発動するための媒体の杖は葛葉先生の部屋だ。

どうにか避けていた攻撃も疲れてきてカスる程度だけど避けきれなくなってきたし……なんか頭がボーとっしてきた。

疲れはじめて血を流しているからかもしれない。

なんだろう……目が霞むというか見えていない物が見えるというか……さっきまで居なかった人が見える。

アレは、あの人はなんなんだろう？

宙に浮いていて人じゃないような……そんな人が何人も見える。

「……キミたちは誰？」

答えてくれない。ううん、口を喋るように動かしている。答えてくれているけどボクには声が聞こえないだけ。

いったいなんなんだ……あの人達以外にも薄い霧みたいのも見える

し。

霧は周りを、空間を埋めつくしている。

？ ……何これ……………？

よく見るとボクの腕…身体を包むように纏うように光が被われている。

……ああ、そうか。解ったような気がする。この光りはボクの魔力だ。

何で解つかは分からないけどそんな気がするんだ。

と、いうことは霧は大気中の魔力？　じゃあ、あの人たちは……精霊？

だとしたら、どうして急に視えるように？　今まで視えていなかったのに。

S i d e - エヴァンジェリン -

「オイ、御主人。急ニ攻撃ヲ止メロツテドウイウコトダ？　セツカク楽シクナツテキタツテイウノニヨ」

「うるさい！　このボケ人形……………?!」

なんだ？ これは坊やの魔力が高まってきている…… どういうことだ？

それに、あの眼は…… まさか魔眼か！！

そんなことジジイに見せられた資料には載っていなかったぞ！

「ぐふっ?!」

「ドウシタ御主人?!」

なんだ今のは！ 坊やが、こちらに腕を殴るように振るうような素振りをした瞬間、私の腹に何かをぶつけられたような重い衝撃が！

「グエツ?!」

「チャチャゼロ!？」

今度はチャチャゼロが！ なんだというんだ！ 坊やが殴るように腕を振るう度に何らかの衝撃が飛んでくる。

不可視の魔法か？ いや、坊やは魔法媒体を持っていないはずだ。魔法の訳がない。

現に坊やは手に杖を握っていないし指に指輪のような物はしていない。

だが、喰らったから分かる。坊やの視えない攻撃には魔力を感じる。

障壁を貼り防御をする。障壁には何かを弾くような感触がある。

チツ。訳が分からん。媒体を所持せずに魔力を感じる視えない攻撃をしてくると。

タカミチの「居合い拳」と似てはいるが「魔力」が乗っている分タチが悪い！

ん？　なんだ、坊やは何をしているんだ？

視えない攻撃を止めたと思ったら今度は腕を振っている。

あれはまるで何かをかき集め練り纏めているような……

「なっ！？」

あの光りはなんだ！！　何かを集めるかのように腕を振って練り集めるいたと思ったら坊やの胸の前辺りが光りはじめた！

徐々に光りが球体の形状になっていく……この感じは……ま、まさかアレは……！！

まさか魔力だというのか、あの光りの球体は！！

あれが魔力の塊だとする。眼で直接目視できるということは、あの光りの球体には、とてつもない魔力が溜まっていることになる。

不味い！ あんな魔力の塊を食らったら最悪、半身は持っていけるぞ！！。

「ククク」

凄じじゃないか坊や。まかさ貴様が魔力を操ることができるような人間だったとはな。

「だが、そう安々と喰らってはやらんぞ！！」

Lesson・4（後書き）

これが蛍の力です！

使い方を身につければチートに！

Lesson・5（前書き）

今回は時間に間に合ったー！！

蛍の能力で独自解釈が……大丈夫かなこれ？（汗）

Lesson 5

持ち前の不幸体質で死んでしまい転生した少年「澄川 蛭」は世界の管理者と名乗る女性に転生先の世界には魔法が存在すると知らされ三つの力を授かった。

一つは魔法を使う才能。二つ目に魔力制御の才能を。この二つだけでも少年が転生した魔法が存在する世界ではかなりの力を得られる。しかし女性は満足しなかった。最後の三つ目に漫画やゲーム等の力を求めてくると思っていたからだ。

だが、少年が求めたものは力ではなく「不幸体質」の除去といった願い。それに女性は肩透かしをくらってしまった。

少年の不幸体質は「体質」というように文字通り前世の肉体が生まれながらに宿していたもの。魂とは何一つ関係が無い。故に転生し新たに肉体を手にするのだから世界の管理者である彼女に願わなくとも消えて無くなる物なのだ。

なのに少年は彼女に願った「不幸体質を消し人並みの幸福が欲しい」と。

どれほどまでに少年は不幸だったのか、人並みで良いから幸福が欲するとは……。

その少年による些細な願いを彼女は叶えたが、満足していなかった彼女は少年が転生する際に別の力とギリギリのところで摩り替えた。

なぜ彼女は満足しなかったかは分からないが恐らく厨二病だったのだろう。

そして現在、エヴァンジェリンの別荘内でのエヴァ（+チャチャゼロ）との戦闘（もはや虐め）にて魔法媒体を持たず反撃できずに追い詰められた中。蚩は世界の管理者に授けられた最後の力である「まそつがん魔操眼」を才眼させた。

授けられた力「魔操眼」それは魔力を操ることができる力が瞳に宿った魔眼。

それは自身が保持する魔力と大気に存在する全魔力を精霊を己が意思のまま従え自由自在に操ることができる魔法理論を完全に無視した力。

「魔操眼」は魔力と精霊を従わせ操ることができるが。それには、かなりの精神力が必要となる。魔力は精神で操る物であり魔力は精神でもある。よって蚩には「サウザンド・マスター」を越え、これから出会うことになる「東の姫巫」をも越える巨大な魔力を「この世界」に転生し産まれ落ちた際に授かり得た。

その事により……狙われ新たな両親を失ったことを彼は知らない。

最初に蚩が隙をつき数m先に距離を取り宙に浮いていたエヴァとチャチャゼロに放ち当てた攻撃。大気の魔力を腕に纏わせ、練った自身の魔力を起爆にし放った人には視認することができない視えない

魔力の弾丸。

本来、魔力とは一定の場所に一定以上の巨大な魔力が溜まることにより、修行によって感じることはできるが見ることができない物を初めて目で視認することができるエネルギーである。（例：世界樹の発光現象）

魔力は魔法……詠唱と術式により形を得るが、それは魔法といった形の枠になり魔力そのものを視認できている訳ではない。よって魔法として形を得た魔力がどれ程の量かは、やはり感じることでしか知ることができない。

故に、600年以上を生きた真祖の吸血鬼であり最強の魔法使いのエヴァンジェリンにも隙をつかれたとはいえ避けることができなかったが……

正体と威力を知ってしまえば障壁で容易に防げる……だが「あれ」はそう容易く防げん。

エヴァが驚異を感じとった物。それは蛍が次に取った行動から作りだした物。

何でこんな事ができるかは分からない。だけど「これ」なら、あの女の子にダメージを能えることができるかもしれない。

「魔操眼」の力を感じ完全ではないが理解した蛍は「魔操眼」の次

の段階に進んでいた。

本来は念じ想像するだけで大気の魔力を眼の力で操れるが才眼したばかりである蛍には無理だった。

しかし、それを自身の魔力を拡散させ大気の魔力に馴染ませることにより可能にし大気の魔力を両腕でかき集め自分の両手で包むよう球体状に練り纏めた。

球体状に練り纏めた魔力は人の「目」でも視認できる光、発光する程の巨大な量。

眼の力を知っていた訳ではない。だが感じ取り僅かだが理解した。

これだけの魔力量な塊なら、あの子でも……ぐっ！

だが魔法を学び使うことができるが肉体を鍛えていない蛍の身体では、この魔力量を制御するのに耐えきれぬ物ではなく。エヴァの魔法射手とチャチャゼロの斬撃により浸けられた傷以外の部分から出血をし始めた。

げ、限界だ。この攻撃で終わらせることができなかったら……キッ！

肉体の限界を感じ、この一撃が最後になると覚悟する。その覚悟を感じ取ったエヴァも

ふんっ。限界か。まあ、あれ程の魔力を生身で練り纏めたんだ仕方あるまい。

「……良いだろこれが最後だ！！ 来れ氷精、闇の精 闇を従え吹けよ常夜の氷雪」

蚩による最後の一撃を迎え撃つ為に上級魔法を魔力を高め練り唱え始める。

「いくぞ坊やつ！？」

詠唱を唱え終え放つは上級魔法

「闇の吹雪！！！」

エヴァにより上級魔法が放たれると同時に蚩も

「……………ッ！！！」

最後の力を絞りだし限界まで練り纏めた発光する球体の魔力を己れの魔力を起爆させ、エヴァンジェリンに向かって射ち放つ。

ぶつかり会う「魔法」と「魔力」。

二つは拮抗しあい周囲に衝撃波を生み出し　そして……………。

「ドウデモイイケドヨオ空気ダナ　オレ　ケケケ」

Lesson・5（後書き）

かなり責められそうだ……後悔はしていない

だけど嫌だなあ……………

近いうちに蛭の設定をもう一つ小説を作りそちらに載せる予定です。

Lesson・6 (前書き)

なんとか今回も時間に間に合いました。

よかったよかった。

Lesson・6

ここは……。

気がつくと蛸は暗闇にいた。何も見えない真っ暗な暗闇に。

先ほどまで塔のような建築物下の海辺で綺麗な金髪の洋人形のような外人の女の子と戦っていたはず。

なのに、このような場所に自分は居る。蛸は理解できなかった。

夢？ ……だけど。

普通なら夢だと思いたくなるが、妙に現実味があり蛸にはそう思えなかった。それに似ている感覚を場所を蛸が知っていたからだ。

この空間は自分が「澄川蛸」になる前に居た場所に世界の管理者が居た場所に似ているのだ。ただ違うのは何一つ光が無いという点だけ。

もしかしてボクはまた……！？

ここが世界の管理者の居た場所に似すぎているせいで自分がまた死

んでしまったのではないかと思考しようとした瞬間。

こ、これって。

突然と何も見えない真っ暗な暗闇の空間だったのが別の風景に移り変わった。しかも5年前までは毎日眺めていた懐かしい風景に。

ここはボクの家？ だけど家は放火されて無くなったはず。

そう。風景は、あの誘拐事件が起こるまで蛭が両親と一緒に楽しく幸せに暮らしていた自分と家族の家だった。

だが家は既に無い。膨大な魔力を狙い両親を殺し蛭を拐った者たちが魔法の痕跡を一般人に悟られない為に隠蔽工作として火を放ち焼き払ったのだ。

無くなったはずの家の映像。映像は進んでいき最愛の二人も映し出されていく。

お母さん。お父さん。

前世では得ることができなかった幼い自分を含めた三人の懐かしい光景。しかし、その懐かしい光景は長く続かず、あの事件が起きた夜へと進む。

や、やめ……これ以上は見せないで。い、いやだ。

蛍の拒絶も虚しく映像は進む。深夜とはいえやけに静だった夜。蛍と両親は寝室で川の字を作り寝ていた。そんな中。突如、部屋の外から硝子が割れる大きな音が。

音により眠りから覚め、父親が音がした部屋の外へ何が起きたかを確認するために部屋から出ようとした瞬間。父親は見たことがない光に体の何カ所も貫かれた。

貫かれた父親は血を流し倒れる。母親は悲鳴をあげ夫の名を呼び叫び自然と、その光景を見せないよう蛍を抱き寄せたが蛍は既に視てしまっていた。

何が起こったか全く理解できなかった。あの優しく強かった父親が血だらけになり倒れた。

これは夢で悪夢だと信じたかった。だが悪夢だと思った現実に進み、ローブを着た知らない数人の男たちが部屋に入り込んできた。

ローブを着た男たちは蛍の存在を確認した瞬間。探し物を見つけだしたかのように笑顔を浮かべ母親やから引き離し光りのローブのよな物で蛍を拘束する。

蛍を拘束した男は「GET」と言葉を漏らし仕事を終え帰ろうとしたが他の男たちは、そうしなかった。

理由は簡単。蛍の母親が美しくスタイルの良い美女だったからだ。母親は夫以外の知らない男どもに服を剥かれ犯される。

犯されながらも泣きながら蛍を離せと叫び続ける。その姿を蛍は自分を拘束した男に札のような物を口に貼られ言葉を発せられずに泣きながら無理矢理に見せ続けられた。

そして行為が終わり最後には母親も父親と同様に光りに体を貫かれ殺された。

「いあああああああつ！！！！！！？」

二度と見たくなかった。忘れたくとも脳裏に焼き付き忘れられない悪夢の記憶。自分が転生したことで手にした膨大な魔力により自分が望んだ「人並みの幸福」による「人並みの不幸」が生んだ幸せの日々が終わった日の悲劇。

「……な、なんなの。いったい何でまたコレを見なくちゃいけないの……」

『クククク。それが貴様の闇の根源だからだよ小僧』

「っ？！！」

絶望と哀しみに押し潰されそうになったとき。どこからともなく声が響き渡る。

『貴様が絶望し心の闇を増幅させ心の隙間を大きくすることで見えぬを受け入れる器が広がる』

「だ、誰?!」

見えない声の主は蛍の問いに答えず淡々と話を進めていく。

『人間よ。その眼「魔操眼」を宿し産まれてきた己れのその身を呪い怨むがいい。

……しかし。「眼」の使い方を知らぬか。我としては、それは困る。その「眼」は我が貴様に宿る為の依りしろとなる物だ。どれ……』

そして

「うあああああああああつ?!」

何をされたか分からないが。「魔操眼」についての知識。使い方が頭に入り込んできた。

あ、頭が。頭が割れる！！

差ほどの量ではないが蛍の頭を痛め苦しめるには十分だった。

『これで「眼」の使い方を知り理解しただろ。クククク。我等が主にして我が器よ、それじゃあな。次に会うときまでに器を拡げ強くなっておけ。クハハハハハハッ！！』

その言葉を最後に頭痛が終わり蛍は再び気を失った。

「！！！！！！？」

目を覚まし気づき身を起こした場所はさっきほどまで居た暗闇でも毎朝、自分が目を覚ます刀子が寝るベットの隣に敷いた布団の中ではなく

ここは……どこ？

記憶にない全く知らない白で統一された部屋のベッドの中だった。

「……あぐうつ！」

ここが何処なのか詮索しようとベッドから起き立ち上がろうとしたが身体全体に激痛が走りできなかった。なぜ身体に激痛が走るのかと自分の体を見て確認すると

「包帯？ それに裸！」

身体には包帯が全体に巻かれておりパンツ以外は身につけていなかった。そして

「ようやく起きたか坊や」

先ほどまで自分に一方的に攻撃してきた。初めての戦闘をした相手である金髪の少女。エヴァンジェリンが部屋に入ってきた。

Lesson・6 (後書き)

蛭は謎の声の主により二度と見なくなかった物を見せられ魔操眼の知識と使い方を与えられました。

ええ。ご都合主義とかいう流れですねww

Lesson 7 (前書き)

どぅーっ……どぅーっになったorz

Lesson 7

蛭がエヴァ宅のダイオラマ魔法球内で力に覚醒した同時刻。

「準備は終わったかい？」

「ええ。十分に」

「今回は5年前とは違うよ。僕が中に送ってあげるけど麻帆良の魔法使い達はやっぱりだからね」

「ふふふ。貴方がくださった転移符があります。それに今はあの高畑が居ませんので大丈夫でしょう。」

「そう……ならいいけど」

麻帆良学園都市のある郊外に学園都市内に侵入しようとする不穏に動く男達の影が。

一人は白髪の学生制服のような服を着た蛭と同年代だと思われる少年。少年に向かい合うようにローブを着た魔法使いだと思われる5人の男達が並ぶ。

「それじゃあ送るけど。5年前の人たちのようなヘマはしないでよ」

「我々は、あのようなヘマはしませんよ。そんなことより約束は覚えてますね？」

「もちろん。彼を連れ出してくるのに成功したらキミたちを支援させてもらう」

「けっこう。それでは……」

「……………」

白髪の少年が手を翳すと男達を囲むように水が現れ男達を飲み込む。水が消え、その場には少年一人だけになる。

S i d e - 白髪の少年 -

どうやら上手く彼らを送れたようだね。学園長の結界は強固な物だと聞いていたけど意外と容易かった。

しかし彼らは油断をし過ぎていた。A Aランクの高畑・T・タカミチが留守にしているとはいえ学園の魔法使い達は関東魔法協会本部を守る精鋭達だ。

まだ力を持たない少年の彼をそう簡単には拐えないだろう。それに、わざわざ関東魔法協会本部である学園に迎え入れたんだ。膨大な魔力を持つ彼には、それなりの実力を持つ護衛が付いてもおかしくない。

僕が感知されないよう結界を抜いて送ってあげたけど果たして彼らは無事に彼を連れてこれるかな。

暗闇より目が覚めた蛍は目覚めたと同時に自分が介抱され寝かされていた部屋に入ってきた別姓の主であるエヴァンジェリンに己の力について説明した。

暗闇の中で何者かにより授けられ得た魔操眼の知識。現実のような暗闇の夢での出来事。

その話した説明の中には自分の過去も含まれていた。その蛍の話をエヴァンジェリンは椅子に座り静かに。ただ静かに聞いていた。

なるほどな。やはり魔眼だったか。しかも、なかなかえげつない力だ。成長し練度を上げれば相手が魔法使いならば、どのような実力者でもかなわなくなるだろう。まあ、私や一部のバグどもを除いてだな。

エヴァが思うように蛍が宿す魔操眼の力は魔法使いにとって天敵と

いってもいい。使い方を知った蛍の訓練しだいで魔法使いに敵はいなくなるだろう。故に

ジジイの依頼を受けるのはしゃくだが、資料が確かなら才能も申し分ないはず。フッフ、面白い。良いだろう私自ら鍛えてやるうじゃないか！それに、コイツは自覚していないようだが過去をトラウマにし闇を抱えてこんでいる。もしかしたら私の固有技法を修得できるかもな。

蛍の魔操眼と才能。抱えこむ闇に興味を持ち、元々は学園長の依頼だったがそれとは関係なく原石である蛍を自らの手で鍛え上げたくなつた。

「澄川蛍！」

「はい！」

「ジジイからの依頼で貴様が自分の身を自分で守れるよう鍛えてやってくれと頼まれたが。喜べ。私が貴様を最強の悪の魔法使いになれるよう鍛えてやる！！」

[illegible]

あ、悪の魔法使いつてなに！！ それになんで見ず知らずの女の子に鍛えられないといけないのっ！？

こうしてエヴァンジェリンの特訓による蜚の地獄の日々が始まった。

Lesson 7 (後書き)

何故かあの人が早くも物語に出演しました。

白髪の少年っただけでバレバレですね。分かります。分かっていますよ！！

Lesson・8 (前書き)

投稿一時間前に書き始めたとはいえ短すぎる

すみません(汗)

Lesson・8

Side・エヴァンジェリン・

先の戦闘で資料どおりに才能が有ることは肌で感じたが。まさかここまでとはな。

魔法薬で傷を癒し一時間の休息後。魔法の射手しか覚えていないなど私の弟子として相応しくないからな。幾つか教えたら威力は修業次第として…… たった2時間弱で教えた魔法を全て形にするとは。

魔眼の魔操眼の力なのか坊や自身の才能なのかは知らんが”奴ら、並みのとんでもないバグキャラだ。

私が鍛えるのだから当たり前だとして、このまま魔操眼の力を完全にマスターすれば”奴、や私の領域に数年単位で踏み入れるな。

ククク。ジジイには感謝しないとな。これほどの逸材をくれたのだから。

坊やの魔力は私を学園に封じ込め縛り付けたバカをも超えるほどに膨大。魔操眼の力と坊やの成長次第で呪いをどうにかできるかもしれない。

フフフ。私好みの広域魔法を使う威力重視の歩く砲台に育て上げてやる！！

そして私が満足する実力を手にした際には我が従者として向かい入

れてやろう!!

フ、ハハハハハハハハハハハッ!!!!?

S i d e - 蛭 -

今、物凄く嫌な予感がする寒気がしたような気がする。

……うん。気のせいだね。そうだよきつと気のせいだよ。

それにしても凄い。彼女に貰って才能の力。魔法の射手は初級魔法だから簡単に覚えて自由に射てるようになったんだと思っただけと違っていた。

雷の暴風や氷爆を形だけだけど簡単に覚えて使えるようになった。これで「眼」の力を使って精霊を従わせられるようになったら……ゴクッ。

あと自由のことと同じぐらい驚いたことが。

まさかボクと同じ年くらいの女の子が、あの「闇の福音」だったなんて。

施設の人に過去最悪の賞金首だったって聞かされていたけど……まさか、この学園で学生をしていたなんてね。

それに凶悪な魔法使いだけど人を魅了する絶世の美女だとも聞かさ

れてけど……詐欺だよねこれ？

真祖の吸血鬼の正体が10歳ぐらいの少女だったなんて。確かに綺麗で可愛いけど……うん。

あの「そんなに美人なら一度ぐらいは見たかったよ」って言っていた施設の人には黙ってしよう。きっとそれがあの人の為になるはずだから。

……ボクは強くなれるかな？

目の前で大切な人を失わずにすむぐらいに強くなれるかな？

確かにエヴァさんの元で鍛えてもらえれば強くなれるかもしれない。でもエヴァさんの知識や経験は600年以上の物で膨大過ぎる。

彼女から貰った才能の力があってもボクじゃ学びきれないかもしれない。

けど……大切な人を守る力が手に入るかもしれないんだ。

強くなる為に、守る為の力を手に入れる為に、もうあんな思いをしなくても良いように頑張ってエヴァさんについていこう。

守られているだけじゃ前には進めないから。

「ケケケ。ナカナカ切りガイノアル奴ガデキテ嬉シイゼ。コレデ
毎日暇セズニスムナ」

Lesson・8（後書き）

蛍君がエヴァンジェリンからバグキャラとして認定されました。

蛍君が幾つかの魔法を覚えました。

蛍君が何かを決心しました。

蛍君がチャチャゼロから暇つぶし要員として認定……目をつけられました。

Lesson・9（前書き）

すみません。熱がでて頭がボーとして執筆速度が下がり更新が予定時刻より遅れました。

ボーとした状態で書いたので纏まってなく変かもしれません。

Lesson・9

エヴァによる虐め……もとい簡単な基礎訓練を終えエヴァ宅をあとにした螢は走って居候先の刀子の部屋がある職員寮に向かっていた。

はぁ。思っていた以上に遅くなっちゃった。なにも凍り漬けにしなくてもいいのに……。

本来ならダイオラマ魔法球の設定で外の時間の一時間で別荘から出れる筈だったのだが。基礎訓練中にテンションが上がったエヴァによる「こおる大地」を喰らわされ凍り漬けになってしまい、復活するのに時間がかかり時間をオーバーし二時間も別荘内で過ごすはめになってしまったのだ。

エヴァは家に泊まっていけと言ったが、人見知りの螢には別荘内で二日間一緒に居たとはいえ、会ったばかりの人の家に泊まるのは無理だった。

それに世話になっている刀子に心配をかけるのが嫌だった。

エヴァに教えてもらった肉体強化の魔法「戦いの歌」で自分の身体を強化し街道を走る。その街道にある一つの建築物。屋上に五つの影。

「あの餓鬼か？」

「写真は5年前の物ですが面影がありますし。あの魔力量です間違いないでしょう」

一人の男が質問すると質問された男は懷から写真を取り出し街道を走る蛍と照らし合わせる。

写真に写るのは5年前の蛍の姿だが成長しても残っている面影と膨大な魔力で自分達が狙っている少年だと肯定する

「わざわざ協会本部に招いたのだから護衛が付いていると思ったが」

「どうやら付いていないようですね」

関東魔法協会の本部なのだから膨大な魔力を持つ蛍に護衛ぐらい付いていると考えていたのだが付いていなかったため男達は拍子抜けをしていた。

それもその筈。学園は強固な結界に守られており結界には侵入者用の感知も含まれている。その為、学園長は護衛はいらないと判断し付けていなかった。

だが。男達は協力者である白髪の少年によって結界に感知されずに結界の内側に転移してきた。今回は完全に平和ボケし結界の力に慢心した学園長の判断ミスだ。

「では行くぞ！」

今夜は他に侵入者はいない。その為、学園長側は警戒を緩い。おかげで自由に動けると判断しリーダーらしき男の掛け声で男達はターゲットである蛍を捕らえ連れ出す為に動きだす。

急いで走り街道を抜けあと少しで職員寮にたどり着くところで蛍の足が止まる。

な、なんか嫌な感じが……この感じは視線？

前世で身に付いた危機感知により男達の視線を正確にはないが感じとったのだ。

「まさか勘づかれるとはな」

急に足を止めた蛍が周りを見渡し始めたため勘づかれたと察知した

男の合図で姿を表す。

「だ、誰?!」

突然、姿を表したローブ姿の男達に警戒し身構える。その際にエヴァに貰った魔法媒体である指輪を装着する。

エヴァが指輪を渡した理由は二つ。

施設で貰った杖は練習用で蜚の膨大な魔力には耐えきれず、いつ壊れるかが分からない。エヴァに渡された指輪は特集な金属素材で作られていて壊れる心配がない。

それと魔力を操るとき完全に思考だけで操れないので手で感覚的に操る為、杖は邪魔になるからである。

「ふん。我々が誰かなど貴様が知る必要はないんだよ」

そう言い男は手を前に出し詠唱を始め、それと同時に他の男たちは蜚を囲むように動き陣取り、こちらも詠唱を始める。

「我々と一緒に来てもらおう」

詠唱が終わり5人の男たちから放たれた魔法が蜚に迫る。

Lesson・9 (後書き)

どうだったでしょうか？

全然纏まっでなくて変じゃありませんでしたか？

Lesson・10（前書き）

うわぁ。本当に短い……

Lesson・10

5人のローブ姿の男達が蚩を囲み魔法が一斉に放たれる。放たれた魔法は初級魔法である「魔法の射手」。

放たれた矢の属性は「炎」「氷」「雷」「光」の4属性。相手は子供だと嘗めたのだろう。放たれた数は一人あたり3本。総数は約15になる。

放たれた数は一般の魔法使が詠唱を唱え放つ数より劣るがたった15本でも障壁を貼らずに「魔力」と「気」のどちらかで防御しなければ確実に致命傷となる。少しでも当たれば動けなくなるとふんだのだろう。

だが。蚩にこの選択は間違っていた。

エヴァンジェリンと出会う前の。魔操眼の力を覚醒させていなかった蚩になら通用していただろう。

蚩はエヴァと出会ったことにより己れが秘めていた魔眼の力を知り、その使い方を知る。そして少い時間で「世界の管理者」より授かった才能を駆使しエヴァから多少だけだが知恵と技術を身体を張って身体で覚え得た。

現在の蚩は二時間前の「魔法を使えるが使えるだけの少年」ではなく「魔法と力の」使い方を知った少年」。

初めての戦闘の相手がエヴァだったのが良かったのか。知恵と技術

を教わったのがエヴァだったのが良かったのか。才能のおかげだったのか。蚩は魔法球内で過ごした二日間で急激に成長し。

並みの”普通の魔法使い」となら渡り合えるようになっていた。

放たれた複数の魔法の矢。これは標的対象である蚩には当たらなかった。

「なっ!？」

「どういうことだ?!」

「我々の魔法の射手が……」

男達は驚き動揺した。目の前で普通はあり得ないことが起きた。

己れの意味で制御されているはずの自分達の魔法の射手が目標に到達する寸前で停止し射る前の状態である光球になったのだ。

ふう。せ、成功した!

男達の射手を阻む正体。それは蚩が作った見えない魔力の二層の壁。エヴァに貰った指輪を指にはめる時、既に魔操眼を発動し作り始めていた。

自分の魔力を放出し自分を円上に囲むよう貼った一つの層。放出した魔力を大気中の魔力に馴染ませ、一つ目の層に纏うよう操り作った二つ目の層。

エヴァさんには通用しなかった。けど、この人達には通用した。

高位の魔法使いであるエヴァ相手だと防げず反らすのがやっとだったが、男達の魔法には通用した。故に

この人達はエヴァほどの魔法使いじゃない！

数で劣るが一人あたりの力量は自分が勝てる物だと判断した。

「ええい！　うろたえるな……？！」

リーダー各の男が何がおきたか理解できず動揺した他の者たちを落ち着かせも一度、魔法を使用したか

「な、なんだこれは！？」

「か、体が！」

「……動かないだと！」

視えない何かに身体を縛られ身体の自由が奪われ阻まれた。

Lesson・10（後書き）

本当に短い……もう少し文字数を増やして長くしたいんだけど集中力が続かないorz

なにかコツってありませんか？

Lesson・11（前書き）

今の侵入者対虫の話し……いつ終わるんだろorz

Lesson・11

放出した自分の魔力を大気中の魔力に混ぜ合わせ作り出した霧状の魔力。

それを蛭は男達が魔法の射手を見えない魔力の壁に止められ動揺した隙に作り出した。

纏わりついた霧状の魔力によって男達の身体の自由を奪う。

「なっ！ 身体が勝手に？！」

一カ所に集まるよう動き出す男達。己れの意味とは関係なく身体が動かされ蛭を囲むようにした陣が崩れ落ちた。

よし。一カ所に集まった！

男達の意味を無視し身体を動かしたのは纏わりついて動きを止めていた霧状の魔力。魔力を動かして下半身のみを操り操作した。

この餓鬼はいつたい？！

予め得ていた情報以上の力を使う蛭の前に男達は混乱していた。

なんでか知らないけど急に操りやすくなった。これなら！

魔力は精神であり精神で操る物。いわば魔法使い同士の戦いは精神の戦い。蛍の視えない力によって動揺し混乱して乱した精神状態である男達に蛍の術から抜け出すことは不可能。

それにより操ることがスムーズになり

「しまった!!」

「つ、杖が!？」

簡単に握力を弱められ魔法使いの要である杖を手放し地面に落とすてしまう。

「我が眼に従え氷の精霊 連弾・氷の10矢」

すかさず氷の矢で落とさせた計5本の杖を破壊。

「くそっ!」

「っ、これじゃあ……」

「い、今の詠唱は？」

蛍が唱えたのは詠唱ではなく「言霊」。魔操眼の力を「言葉」に乗せ精霊を直接従えた。

暗闇の中で得た「魔操眼」の知識。魔操眼の力を制御しきれず眼だけでは精霊を従えられない蛍がその中から探し見つけた「言葉」で精霊を従わさせる「魔操眼」の簡易法である力が「言霊」。

魔操眼の力を乗せた「言霊」によって精霊を従えることによって蛍は詠唱を唱えずに魔法を使うことができる。

くそがあつ！ 聞いていないぞ！ こんな訳がわからん力を
餓鬼が使えるなど聞いていないぞ！！

聞いていないのは当然。蛍の魔操眼の力に目覚めたのは今日。よって知るのは宿し使う本人に目覚めた瞬間に立ち会ったエヴァンジェリンとチャチャゼロだけ。情報を得ることなど不可能である。

動きを止めて杖を壊した。だけど僕にはエヴァさんみたいに凍り漬かせて捕縛することができそうな魔法は使えない……どうしよう。

蛍がエヴァンジェリンから教わった魔法は「雷の暴風」「氷爆」「

雷の斧」の3つ。その中には動きを奪うことができる魔法は無い。もともと覚えていた魔法の中に捕縛用の魔法である「戒めの風矢」があるが長時間の捕縛は無理だ。魔力を操り動きを封じるのにも限界がある。よって

ど、どうしよう。携帯は持ってないし念話のやり方も知らない……。

手詰まりである。攻撃を魔法か魔力を当てれば動きを止められるだろう。だが蛭には無理だった。

頭によぎるのは魔法によって撃ち抜かれ死んだ両親の記憶。エヴァンジェリンのように高位の魔法使いなら自分の膨大な魔力で放つ魔法でも耐えられるだろう。しかし相手の男達は自分より劣る魔法使い。いくら魔力を抑え放つても殺してしまうかもしれない。

蛭は両親を殺されたことによって魔法は簡単に人を殺せる力だと身を持って知っている。それが蛭を躊躇わせる。

今の我々にトドメをさすのは容易のはず。なぜトドメをささない？ どういう訳か知らんが好奇！！

麻帆良学園女子中等部の学園長室。そこにロープの侵入者達と少年の戦いを覗き観戦する影が一つ。

ふむ。どうやらここまでのようじゃな。

影の正体は学園の理事であり関東魔法協会の理事を勤める近衛近右衛門。

魔力反応を感じ覗いてみたら侵入者が入り込んでいたことに驚いたが……まさか、あの子がここまで戦えるとはのお。

近右衛門は侵入者達の魔力を早々と感じ取り観望していた。警備の者達を向かわせることができたはずだが蛍の実力を知るために戦っている本人が狙われていると知りながらあえて向かわせなかった。

さて。そろそろ助け船を出してやるとするかのお。

机の上の電話を手に取り今日の警備を担当する魔法教師に連絡し侵入者達を今見つけたかの様にはぐらかして。

Lesson・11 (後書き)

描写と能力説明を上手く書けなくて意味もなく長くなってしまふ。

おかげで短いから全然進まないorz

バカでごめんなさい。

Lesson・12 (前書き)

はあ。なんちゅーありきたりな展開。

駄目ですね。中二病っていうか中二帰りしてますね。

Lesson・12

学園長が蛭に救援を送って数分。蛭の集中力が切れ始めた。それにより

む？ 僅かだが縛る力が弱まってきた……！

男達を縛り付け動きを奪っていた魔力が弱まり始めていた。一人や二人ならまだ余裕で封じることができただろう。しかし相手は五人眼を使い慣れていない蛭には多すぎる。

魔力は精神。蛭は集中による疲れによって精神が徐々に削られ制御が上手くできなくなってきた。

どうする。どうするボク……考える。考えるんだ！

この均衡の状態をどうするか考え思考し集中するが、それが裏目になる。魔力への集中がおろそかに。

「フフフ。どういう訳か知らんが拘束が揺るんできたようだな」

「やっと動けるようになってきたぞ」

拘束が弱まった男達は身体の力を強め無理矢理抜け出そうと動き出す。基本「魔法使い」は魔法だけに頼り身体を鍛えない。術を学び研究し術式を編み魔法の練度を上げていく。が。彼らは大人だ。

「…………ふっ」

「やれやれ。手間をとらされたな」

弱まった拘束は言わば身体を縛る揺るんだ縄。無理矢理に力を振り絞れば弱まった拘束を抜け出すなど容易い。

「まったく餓鬼だからといって油断し過ぎた」

「もつと楽な仕事だと思っていたんだかな」

「これなら『5年前』に失敗した奴らの方が、まだマシだったんじゃないね？」

拘束から抜け出した男達は身体を伸ばしながら蛍のことなど気にせず和気あいあいと話し始めた。

先ほど間と同じで嘗めているわけではない。媒体となる杖を壊され普通の魔法は使えないが魔法を発動させることができる魔法薬で簡単な魔法なら数回ほど使える。

自分達が知らない技を使われ動揺はしたが相手は所詮子供。油断せずには本気になって大人と子供の体格差を駆使すれば捕らえるぐらい容易くできる。

そんな中、蛭は拘束を破られたことに驚きはしなかった。かわりに別のことに頭がいつていた。

…… 5年前……………？

男の中の一人が言った『5年前』という単語。ただそれだけが異常なまでに気になった。

5年前……………奴ら……………ボクを捕まえに来た。

『5年前』という単語。真っ先に考え思いつき頭に過るのは5年前の”あの日”だけ。

「そうだな。確か母親が『かなり良い女』だったようだしな」

「当時の資料じゃ殺した事になっているようだけど」

「奴らのことだから犯ってから殺ったんじゃない」

「確かにあり得るな」

「奴ら」の事を思い出すように話しているが、その会話だけで十分だった。

この人達の。コイツらの仲間がお母さん達を殺した？

つまり仇？

両親を殺した仇？

ボクから奪った

優しかつた二人を

なんの罪もないのに

唯、自分達の都合で

殺した

殺した

殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した
殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した
殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した
殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した
殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した殺した

男達の目的は自分を連れ出すこと。それと『5年前』の事を詳しく過ぎる程に知っている。それだけで分かった。理解した。

蛍の心の奥底からわき出る今まで感じたことがないドス黒い感情。

「ん？」

「なんだ？」

「風……………」

突如、吹き出す風。だが違う。唯の普通の風ではない。普通の風には無い濃さ。肌にベッタリと張り付くような嫌な風。

風は徐々に強くなり渦巻き吹き荒れ始める。一人の少年を中心に。

少年は先ほどまでと違っていた。子供らしいあどけなさを持っていたが今は違う。

見開いた「眼」は禍々しく光り何かを見つけ出したかのように口は邪笑を浮かべてたらずんでいる。

『……………?!』 ゾクッ……………?

渦巻く風を中心である少年を澄川蛍を見た男達は嫌に冷たい寒気を感じ一瞬で気付いた「こいつはヤバイ」と。

和気あいあいとしていた雰囲気は無くなり恐怖していた。澄川螢の見開く異質な「眼」に。

男達は魔法使いだ。珍しいとはいえ魔眼ぐらいなど知っている。だが知り得る”それ”とはまったくもって違う。あまりにも異質。

「魔操眼」それは”全て”の精霊を従え操る異質の眼。

「魔操眼」それは存在する全ての魔力を操り支配する魔眼。

精霊を従えられると納得できるような綺麗な翠の瞳。それがどうだ。今は禍々しく異質な光を放って翠の瞳に浮かび上がる六角形の紋様が、より濃く浮かび上がって狂喜に満ち溢れている。

まるで待ちわびた獲物を狩れると喜び歓喜し人の命をもて遊び己れの欲を満たす為だけに刈り取る悪魔の眼のように。

Lesson・12（後書き）

ね？　ありきたりな展開だったでしょう？

こんな事しか書けない自分の頭に凹みます。

あー。けっこうキツメのセバスチャン×シエル本を貪り読み漁った
い。

Lesson・13 (前書き)

すみません。二時間も予定より更新が遅れました。

理由はなかなか執筆する気になれなくネタも思いつかなかったの
と内容を纏められなかったからです。

すみませんでした。

Lesson・13

学園長室で引き続き視ていたが

むう。なんじゃアレは？

遠視の魔法で視ていた近右衛門は蛍の突然の変貌に焦っていた。

過去幾つかの戦場で魔眼を持つ者と対峙してきたが……あの
ような紋様は見たことがない。

今でこそ前線には出ず仕事は部下に任せ責任は自分で取るといった
形で関東魔法協会理事を務めているが、近右衛門は学園最強の魔法
使いの実力に知識と経験を持っている。その近右衛門が己れの知ら
ない魔眼に、魔操眼に浮かび上がる見たことのない六角形紋様に驚
き焦っている。

蛍の修業を任せたエヴァンジェリンから先ほど連絡で今の蛍の実力
を全てではないにしろ報告を受けて魔眼のことは聞いていた。だが、
ここまでの物とは思っても予想もしていなかった。

直ぐに電話に手を伸ばし今夜の警備を担当している魔法先生に連絡
をする。一瞬、今夜は非番で保護者を任せている葛葉刀子にも連絡
するか考えたが止めた。

彼女は蛍と一緒に暮らしている。まだ数日とはいえ情が移っているかもしれない。もしもの時に邪魔になるかもしれない要素を持つ彼女を現場に向かわせるにはいけないからだ。

もちろん近右衛門は、その”もしも”が起こって欲しいとは思っていない。蛍は魔法使いとして将来有望な天才で学園の生徒だ。関東魔法協会理事に教育者として、そんな少年を失いたくはない。だが責任者として最悪の展開も予想しなければならない。

毎度の事じゃが……こればかりは慣れんのお。

責任者として学園都市を守る立場なのだから非情にならなければならない。近右衛門はそれが歯痒かった。

感情が憎悪に染まってしまった中で蛍は冷静だった。

コイツらは殺したら駄目だ。お父さんとお母さんを殺しボクを狙う本当の目的が分からなくなる。

事件の実行犯は関東魔法協会支部の者たちに捕まり本国に送還され罰せられている。当然、調査もされている。だが、幼い蜚には犯人のこと以外は詳しく知らされていない。

奴らと目の前にいる者たちの組織。またはバックに付き支援している組織があるかもしれないが、そういったことをまったく知らない。知るためには目の前の奴らを死なない様に傷めつけ聞き出すしか現状では方法がない。

殺さないよう……適度に。

手を伸ばし前にかざす。同時に蜚を中心に吹き荒れていた風が男達に迫り。

ゴキヤ。バキッ。グキッ。といった様な鈍い音ともに

『ぐきやああああああつ！！』

男達が悲鳴を上げ地を転げ回る。男達の腕と脚が曲がってはいけないう方向に直角に曲がっていた。

少し加減し過ぎたかな？ もぎ取れるぐらいに力を込めたはずなんだけど……。

魔力を操り男達の腕と脚に纏わせ捻り力まかせに骨を折った。ただただ冷静に冷たく冷酷に。

少年は心優しかったのが嘘だったかのように男達が激痛にもがき苦しむ姿を見て何とも思っていなかった。

蛭の眼は苦しむ男達を地を這う虫を見るかのように見下ろしていた。

さてと。次はどうしようかな？

次はどのように男達を苦しませるか考え行動に移そうとした瞬間。

「そこまでだっ！！」

男達と蛭の間に突如。二人の乱入者が表れた。

Lesson・13（後書き）

二時間も遅れたっていうのにグタグタで短い……本当に申し訳ありませんorz

そろそろマジで二日に一回の更新が苦しくなってきた（汗）

Lesson・14 (前書き)

微妙だなあ。まとまってそうで……まとまってない。

Lesson・14

侵入者の男達と蛍の間に突如、割って入る男二人組。片方の眼鏡をしたスーツ姿の黒人の男がナイフと拳銃を構え両方に静止するよう呼びかける。

「双方とも行動を止め此方の指示に従え！」

呼びかけは腕に脚が折られ痛み苦しむ侵入者達には聞こえてなく。

邪魔だなあ。この人達も仲間なのかなあ？　いいや。一緒にやっちゃおう。

蛍の眼には二人が男達の仲間だとしか見えていなかった。

二人を男達と一緒に纏めて魔力で縛りあげようとした瞬間

パチンッ！！

と、いった音と共に蛍の身体が後ろに吹き飛んでいた。

「?!!!」

何がおきたか理解できなかった。右肩から左腹にかけて走る痛み。

「妙な動きをとるなよ坊主」

顎髭をはやしサングラスをしたスーツ姿の男性からの警告。見えなかった感じ取れなかった攻撃。おそらく、この男が蚩に向け放ったのだろう。

?!!??!!??

蚩は混乱していた。魔操眼は全ての魔力を視ることができる。魔法として形作られても魔法に込められた魔力は形として視れる。その魔操眼を持つても攻撃が見えなかったのだ混乱しない訳がない。

魔力ではなく「気」による技ならば魔操眼で視ることができなくて当然。魔操眼は魔力と精霊のみしか視ることができない。だが、今の攻撃は「気」よる攻撃ではない。

痛みが走る箇所から残留する魔素が視える。つまり見えなかった攻撃の正体は「魔法」。だが魔操眼では見えなかった。

理由は簡単。サングラスの男が無詠唱で放った魔法が、ただ早すぎて視認できなかっただけ。

熟練された無駄のない動きで放たれた魔法。侵入者の男達を苦しめ

捕まえることしか考えていない今の蛭にそんな魔法を視ることなどできるはずがない。そもそも、冷静な状態で放たれたとしても視えたかどうか分からない。

蛭は慢心していた。魔操眼の力に目覚め全ての魔力と魔法を見極められると思い込んでしまっていたことによる慢心。

魔法を放つ熟練された動作を見る限りサングラスの男は熟練された魔法使いなのだろう。どう考えても魔法だけが使え、たいした訓練もしていない蛭より格が上だ。

そんな相手の磨きあげられた魔法を各下の蛭が見極められることなどできるはずがない。

「…連絡どおり妙な眼をしているな」

サングラスの男が懷から煙草の箱を取り出し煙草を吸いながら近づいてくる。

っ！！

視えなかった魔法に混乱していた為、冷静になれず。サングラスの男が近づいて此方に歩いて来たので咄嗟に魔力を固めた球を放ってしまう。

「ん……？」

だが、放った魔力の塊は男が展開していた障壁に簡単に防がれてしまった。

今のは魔法……じゃ、ないな。侵入者達にしようとしていた攻撃といい妙な力を使うな坊主。

防いだが純粹な魔力だったため視えていなかった。それでも防げたのは積み重ね身に付いた経験によるものだろう。

その為、サン格拉斯の男の警戒心が強まり次の瞬間

「っ???!」

瞬動によって蛍の視界から消え去り後ろに回り込み立ち上がろうとしていたところへ背後から首への手刀。

まったく無駄がない達人の動き。鍛えられていない常人と変わらな
い蛍の動体視力で追えるはずもなく、意識の外から呆気なく意識を
刈り取られ蛍は気絶した。

「ガンドルフィーニ。俺は、この坊主を学園長室に連れていくから侵入者達のことは頼んだぞ」

「分かりました」

「他の連中も向かってきてるようだし楽に済むだろ」

「ええ。その少年の力は得体が知れないので神多羅木さんも気を付けて」

「ああ。じゃ、任せたぞ」

黒人男性に後処理を任せ、神多羅木と呼ばれた髭のサングラスの男は自分で気絶させた蚩を右肩に担ぎ学園長室に向かった。

「さて、お前達を侵入者として拘束し捕らえさせてもらおう」

「ぐう……」

「…………ちっ」

神多羅木にガンドルフィーニと呼ばれた眼鏡の黒人男性は警備としての仕事に取りかかり侵入者達を拘束し、此方に向かってきている他の警備員を待った。

余談だが、拘束された侵入者達は捕まったことを悔やむより少年の攻撃から助けられたことに安息したらしい。

Lesson・14 (後書き)

仕事の×切前でキツイぜ！

あ、キツイのは何時ものことでしたね

すみません。

Lesson・15 (前書き)

すいません。素で今日が更新日だと忘れていました。

すいませんでした。

Lesson・15

神多羅木に気絶させられ運ばれた蛭は学園長室にあるソファーに寝かされていた。その学園長室に幾つかの影。

「まずは侵入者の捕縛。ご苦労じゃったな」

「……いえ」

「侵入者達は指示どおりに拘束した状態で治療班による治療を受けています」

「うむ。最低限の治療が済みしだい記憶から情報を読み取る」

「はっ！」

蛭を運んできた神多羅木。侵入者の男達を拘束したガンドルフイーニに後処理をした他の警備員数名。全員が学園長室に集まり近右衛門に事後報告をしていた。

「それで学園長」

「む、なんじゃね神多羅木君」

「指示どおりに連れてきた、あのぼう……少年はどうするんです

？」

「そうです！ あの少年は何者なんですか！！ 我々は彼の能力について何も知らされていません！ 説明していただきたい」

蛍の力については今回の件で発覚した。その為、魔法先生に魔法生徒を含めた学園の魔法関係者には才能があり保持魔力量が英雄『千の呪文 サウザンド・マスター』を遥かに超える優秀で将来有望な少年だとしか知らされていない。蛍の異質な力を間近で見たガンドルフィーニが前に出て近右衛門に問い詰める。

「ふむ。」

近右衛門もエヴァの報告に今回の件で知った為、どう説明し納得させるか自慢の長い髭を撫でながら考える。

どうしたものかのお。下手をしたら蛍君を排除するなどと言
い出しかねん。

近右衛門は顔には出していないが焦っていた。学園に居る関東魔法協会に在籍している者に傘下にいる魔法使いは正義を信念に理念とした『正義の魔法使い』。蛍の力は「魔眼」。つまり魔の力である。

目の前に居るガンドルフィーニ達には、ちゃんと説明し説得すれば納得してくれるかもしれない。だが、正義を無用意に行使し自分の

「正義」が正しいと自分達の「正義」が絶対だとする正義の為には手段を問わない強硬派の者たちがいる。彼らが問題なのだ。

蛭の力が魔眼だと知ったら間違いなく自分達の脅威になる「悪」とみなし少年の蛭であろうと「子供の姿で我らを惑わしたぶらかす悪魔」などと理由をつけ正義を盾に排除するだろう。

蛭はエヴァンジェリンの弟子だ。しかも珍しく彼女は少年を気に入っている。もし蛭が彼らに殺されでもしたら有無言わずに学園に敵対してくる。現在はサウザンドマスターによって呪いをかけられ弱体化しているがエヴァンジェリンは600年以上を生きた「真祖の吸血鬼」。

知識と経験は学園の魔法使いを遥かに超え膨大だ。弱体化した状態でも脅威の存在。しかも彼女は学園結界にリンクしており侵入者にいち早く気づくことができる。そんな彼女を敵に回すのは得策ではない。

自分の権限で強硬派の彼らを抑えれば良いが、彼らは自分達が正しいと無視するだろう。故に彼らは強硬派なのだ。

むう。本当にヤバいのお。

どう説明し納得させるか悩む中。予想にもしなかったトラブルが発生した。

「た、大変ですっ!?!」

突然、学園長室に慌てながら入ってきたのは治療班の一人。

「……なんじゃ？」

近右衛門の質問に治療班の者から返ってきた返答は信じられない物だった。

「な、なんじゃと！ 侵入者達が逃亡した者を残し死んだ！？」

「……はい」

「どういう事じゃ……？」

治療班の者の説明によると一番最初に治療を終えた男の下に転移魔方陣が発生し、その男が転移し逃亡。直ぐに転移先を逆算し探知しようとしたが、次に他の4人の下にも同様に魔方陣が発生。逃亡した1人目の転移と違い4人は石化し粉々に砕け散ってしまったらしい。

なぜ1人だけが逃げ他の4人だけが石化し粉々に砕け散ったのかが謎だ。口封じだと考えられるが1人だけが逃げたのがおかしい。逃げられるなら全員で逃げるはずだからだ。

蜚のことが解決していないというのに問題が増え近右衛門は頭を抱

え
た。

Lesson・15（後書き）

二日に一回の更新が現状厳しいです。

今回は忘れてしまったからですが18時までに書き上げ更新するのは仕事もあるので厳しいです。

しかもネタに詰まってきたいます。もしかしたら二日に一回で更新できなくなるか更新時間がズレるかもしれません。

本当に申し訳ありません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8527p/>

転生した少年の放浪物語。

2011年1月31日21時43分発行